

## 戦後初期沖縄版国語教科書の研究 (2)

— ガリ版刷り教科書について —

吉田 裕久

(2001年9月30日受理)

Research of the initial Okinawa version Japanese language textbook of the postwar period (2)  
— In the case of the textbook by mimeographing printing —

Hirohisa Yoshida

The original textbook was edited after World War II in Okinawa. It was a textbook by mimeographing printing. It was revised several times. However, since the textbook itself hardly remains today, it is very difficult to clarify the actual condition. I investigated as much as possible. In this paper, I treated from 5-grade to 8-grade.

Consequently, in this paper, the following thing was mainly clarified.

1. With new textbook, many teaching materials of the old textbook were recorded and selected succeedingly.
2. New teaching materials which covered Okinawa were also contained in new textbook.
3. New textbook was edited regardless of Japanese Monbusho.
4. Since the issue date is not entered in a new textbook, it is difficult to distinguish the first edition or a reprint.
5. There is also a page which the child replaced with the pencil in a new textbook.

Key words: Okinawa, Japanese language textbook of the postwar period, textbook by mimeographing printing.

キーワード：沖縄，戦後国語教科書，ガリ版刷り教科書

### (2)のはじめに

前稿に引き続き、初等学校五年生用『よみかた』から取り上げていく。

#### ◎五年生

五年生用としては、(1)『よみかた 五年生』（『琉球史料』）と(2)『よみかた 五年生』（那覇市市民文化部）との二冊を見いだすことができている。(2)は目次と冒頭の四教材を欠いているが、目次から見る限り、残存する5以下の教材名が(1)と合致するので、これら二冊は同一教科書だと推定される。したがってここでは同一物として見なし(1)『琉球史料』によって欠落部分（1 礼儀 2 いも掘 3 ベンゲット道路 4 開票の日）

を補いながら、原初形態を止めていると思われる(2)を取り上げておく。

- (1)『よみかた 五年生』（『琉球史料』）
- (2)『よみかた 五年生』（那覇市市民文化部）

- |   |                      |
|---|----------------------|
| 1 | 礼儀（←『初等科修身』）         |
| 2 | いも掘（⇔『小学国語読本』9-14）   |
| 3 | ベンゲット道路（☆新教材）        |
| 4 | 開票の日（⇔『初等科修身』3-4）    |
| 5 | 遠泳（⇔『初等科国語』5-15）     |
| 6 | ことばと文字（⇔『初等科国語』5-7）  |
| 7 | 飛行機の発明（←『小学国語読本』9-3） |
| 8 | かんこ鳥（⇔『初等科国語』5-11）   |
| 9 | 炭焼小屋（⇔『初等科国語』5-12）   |

- 10 農夫作兵衛 (←『初等科修身』3-5)
- 11 秋のおとづれ (←『初等科国語』5-17)
- 12 小さなねぢ (←『小学国語読本』9-7)
- 13 ひざ栗毛 (←『小学国語読本』9-24)
- 14 名護浦の海豚捕 (☆新教材)
- 15 アメリカだより (←『小学国語読本』9-12)
- 16 星の話 (←『初等科国語』5-14)
- 17 久田船長 (←『初等科修身』3-8, 『小学国語読本』10-13)
- 18 もくせいの花 (←『小学国語読本』9-26)
- 19 仏法僧 (←『小学国語読本』9-13)
- 20 雀の子 (←『小学国語読本』9-11)

1「礼儀」は、「細井平洲」の一段落を削除。

「わが国では昔から礼儀作法が重んじられ、外国の人から、日本は礼儀の正しい国だと言はれて来ました。時勢がうつり、人がかはつても、礼儀作法の大切なことには、かはりはありません。私たちは、いつそう注意して大国民としての品位をおとさないやうにつとめませう。」→「沖縄では昔から礼儀作法が重んじられ、外国の人から沖縄は守礼の国だと言はれて来ました。時勢がうつり、人がかはつても、礼儀作法の大切なことには、かはりはありません。私たちは、いつそう注意して人としての品位をおとさないやうにつとめませう。」…以上、沖縄的に修正されている。

3「ベンゲット道路」は、沖縄教材である。フィリピン・バギオへの35キロにも及ぶ開拓道路（ベンゲット道路）を沖縄の人が困難にもめげずやり通したという話。

6「文字」—最終部分は手書きになっている。

7「飛行機の発明」は、次の3箇所が訂正されている。

- ・岡山の幸吉→沖縄の安里
- ・明治29年→1896年
- ・我が国→削除

最初は教材の沖縄化、他郷材にも見いだされる。年代表記も元号はすべて西暦に改められている。これも脱日本意識と、アメリカの表記への変更の一端か。

なお本教材は、教材名からも明らかなように飛行機を話題にしている。本土では飛行機に関することはすべて削除の対象であったが、本教材の場合、軍事に生かされているところまで記述されながら削除の対象になっていない。本土では考えられないことである。この辺り、占領軍の管轄の違いによる不統一か？

10「農夫作兵衛」、11「秋のおとづれ」は、『よみかた 五年生』（那覇市市民文化局）のpp.31~40が欠如しているため、『琉球史料』によって推定。

14「名護浦の海豚捕」は、その名の通り、沖縄本島中部・名護湾における集団作業での海豚捕りを描いた沖縄教材である。こうして沖縄の地域教材を一巻の中

に数教材含めようと努力したようである。

15「アメリカだより」には、以下のように多くの修正箇所がある。

・「サンフランシスコには、日本人がたくさん住んでゐます。ハワイと同じやうに、日本人の子供たちは、アメリカの小学校と日本語学校と、両方へ通つてゐます。今、私が泊つてゐる旅館も日本人の経営ですが、今年九つになる八重ちゃんといふ女の子は、英語も日本語も非常に上手です。」…削除。

・「日本がある、皆さんに見送つていただいた横浜」→「故郷」

・「カリフォルニア州の南部は、日本人が早くから来て農業を営んだ所で、ロスアンゼルスは其の中心地ですから、市内には、りつばな日本人町があります。日本の書物や、雑誌や、雑貨や、食料品などを売つてゐるのが見かけられます。美しいのは果物屋で、見るからにおいしさうな果物が、山のやうに積まれてゐます。軒並みに日本語が聞かれ、日本人の子供や女の人が、店先でにこにこしてゐます。」→「見るからにおいしさうな果物が山のやうに積まれてゐます。」

・「日本の選手」→「各国の選手」

・「サンフランシスコでも、ここでも、私は多くの学校をたづねましたが、きつと日本人の子供の成績のよいことを聞かされて、涙が出る程嬉しく思ひました。しかし、又無邪気で活発なアメリカの子供が、教室ではお行儀のよいのにも、すつかり感心しました。皆さんは、お行儀のよいことでも、アメリカの子供に負けないでせうね。」…削除

・たまさか→たまに

・（シカゴは）此の世の地獄だと言つた人もある程…削除

・走つてゐるのでから、考へると少々をかしくさへなつて来ます。→走つてゐます

・埠頭→とはば

本教材を、これほど多くの修正箇所がありながらも採録したのはなぜだろうか。その採録のエネルギーが沖縄側編纂者にあつたのか、それとも検閲者アメリカへの配慮にあつたのか、そこはよくはわからない。が、背景として「アメリカ」への配慮が働いたことだけは確かであろう。「シカゴは、此の世の地獄だと言つた人もある」が削除されている辺りにこの背景の一端がうかがえよう。アメリカの教材化は歓迎するが、そのマイナスの評価はご法度であつたのである。

17「久田船長」…明治三十六年→西暦千九百三年

19「仏法僧」…昭和十年→千九百三十五年

以上の二教材は、7「飛行機の発明」でも見たよう

に、いずれも元号表記を西暦に改める改訂である。

20「雀の子」…『小学国語読本』(9-11)では「雀の子」が五句あったものが、『よみかた 五年生』(那覇市市民文化部)では最初の二句だけが採録され、次の三句「赤馬の鼻で吹きけり雀の子」「やせ蛙まけるな一茶これにあり」「やれ打つなはへが手をする足をする」が省略されている。あるいは最終ページが脱落してしまって元は存在していたかもしれないが、『琉球史料』もこの二句だけを収録していることを考えると、沖縄版ではこの二句だけを採録したのかもしれない。

### ◎六年生

六年生用は、『よみかた 六年生』(那覇市市民文化部)一冊だけしか見いだせていない。この一冊は元々児童が所持していたものである。と言うのも、所々に児童自身の鉛筆による手書き箇所(pp.15~17, pp.25~26, pp.33~34, pp.54~56)、無記入の余白(pp.18~22…漢字練習に当てられている)や、欠落ページ(表紙~p.14, pp.40~41)が見られる。そうした限界はありながら、この六年生用については『琉球史料』にも収録されているので現在検討の対象となるのはこの一冊だけということになる。それだけに貴重な一冊である。(1)『よみかた 六年生』(那覇市市民文化部)

- |    |                       |
|----|-----------------------|
| 1  | (欠)                   |
| 2  | (欠)                   |
| 3  | (欠)                   |
| 4  | (欠)                   |
| 5  | 小さな大発見 (☆新教材)         |
| 6  | 敬語の使い方 (⇐『初等科国語』7-4)  |
| 7  | 晴れ間 (⇐『初等科国語』7-10)    |
| 8  | 雲のさまざま (⇐『初等科国語』7-11) |
| 9  | 冬の月 (⇐『小学国語読本』10-20)  |
| 10 | 発明王エジソン               |
| 11 | 稲むらの火 (⇐『初等科国語』6-4)   |

- |    |                      |
|----|----------------------|
| 12 | 鎮西八郎為朝 (⇐『初等科国語』7-9) |
| 13 | 山の朝 (⇐『初等科国語』7-12)   |
| 14 | 師につかへる (⇐『初等科修身』4-5) |
| 15 | 母の愛 (⇐『初等科国語』8-9母の力) |
| 16 | 月光の曲 (⇐『初等科国語』7-16)  |
| 17 | スマトラ人を送る (☆新教材)      |
| 18 | 柿の色 (⇐『小学国語読本』10-9)  |

このガリ版刷り教科書の典型的な姿として、児童が鉛筆によって書き入れた部分A(8 雲のさまざま, p.25)と、挿絵が含まれている部分B(18 柿の色, p.66)とを、二枚の写真で以下に載せておく。

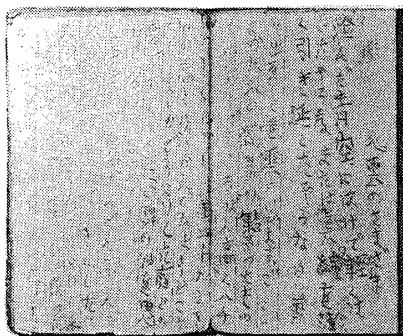
1~4については、残念ながらどのような教材が採録されていたのか、現時点では分からない。

5「小さな大発見」は、硬水・軟水をめぐる科学読み物である。ここは児童が鉛筆で書き入れた部分であり、所々判読不能の箇所がある。冒頭部分を抜粋すると、次のようになっている。

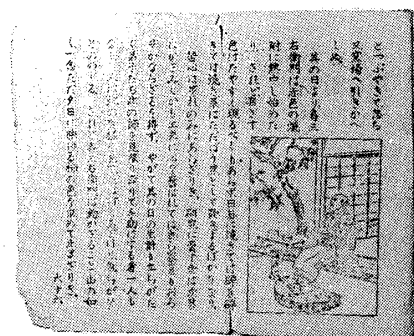
正雄君は国頭の山手の村から知念市へ□(脱落)年振りに帰って来ました。向かふでは聞いたことのない小鳥がさへづってゐました。谷川の水はすみきって美しく小えびがたくさんおよいでゐました。正雄君はこちらへ来てから山とは違った色々のことに気がつきました。正雄君は朝近くの家から顔を洗ふ水を汲んで来て父にあげました。正雄「おとうさん、こちらの水で顔を洗ふと石鹸がよくおちます。国頭ではなかなかおちま(10字程度不詳……引用者)かどうか。父「うんよく気がついたがこちらでは石鹸の泡立ちが悪くてお洗濯に骨が折れます。それにお洗濯のできばえも<sup>(77)</sup>無もよくありません。(以下略)」(p.1)

場面を沖縄にして、児童に身近な書き方にしてある。国頭・知念は、それぞれ沖縄本島の北部・南部の地名である。

17「スマトラ人を送る」も沖縄教材である。難船したスマトラ人を本国に送り届ける任を難航路ゆえになかなか引き受ける者がなかったが、沖縄の尚把志は



写真A 雲のさまざま (手書き)



写真B 柿の色 (挿絵)

この難業を快く引き受け、無事に本国に送り届けた。スマトラ人は手を合わせて感謝し、スマトラ国王からも多くの礼物が送られた。沖縄の人の勇気と優しい心、さらに実行力が示された教材である。また、「なるほど那覇は東洋第一の国際都市だ」とスマトラ人が驚嘆する目を通して那覇の国際的な繁栄を描いている。郷土愛を育てることにつながる郷土教材の一つである。

なお川崎初等学校「教生地方実習日課表」(那覇市市民文化部)には、1948年3月12日3時間目に「7A」クラスでこの「17スマトラ人を送る」を扱う授業計画に関するメモが残されている。これによると、授業過程は6時間扱いで、次のように計画されている。

- 1 一の読み  
内容 復習の扱い 教科書二人に一冊
- 2 二の読み
- 3 三の読み
- 4 四の読み
- 5 漢字の指導
- 6 総括(語句の応用)

教科書が二人に一冊という悪条件下であったこと、授業そのものは旧態依然の内容読解で進められていたことがわかる。この資料から、いずれにしてもこの教科書が、1948年3月時点で実際に使われていたことがわかる。

18「柿の色」の挿絵は、サクラ読本からのものである。この沖縄版教科書の出典の特徴として、直近のアサヒ読本からだけでなく一時期前のサクラ読本からも取材されていることがわかる。

なお出典(『初等科国語』・『初等科修身』)から見る限り、六年生用の異本が仮にあったとしても、この那覇市市民文化部所蔵の本教科書(『よみかた 六年生』)が初期形態のように思われる。

### ◎七年生

七年生用は、『読方 七年生』(那覇市市民文化部)と『読方 七年生』(『琉球史料』)の二冊を見いだすことができている。これら二冊は、全く同一の目次である。

- (1)『読方 七年生』(那覇市市民文化部)
- (2)『読方 七年生』(『琉球史料』)

- 1 かげひなたなく
- 2 蒔かぬ種は生えぬ(⇐『高等小学読本』1-4)
- 3 産業の恩人(野国総管・儀間真常)(☆新教材)
- 4 山村(⇐『高等小学読本』1-9)
- 5 ポチ(⇐『高等小学読本』1-3)
- 6 野火止の用水(⇐『高等小学読本』1-6)

- 7 門を出て(⇐『高等科国語』1-13)
- 8 トラックの上で
- 9 進水の朝(⇐『高等科国語』1-8)
- 10 山吹の花(山吹の花、これを限りに)(⇐『高等科国語』1-10)
- 11 海の朝(⇐『高等小学読本』1-15)
- 12 真の知己(⇐『高等小学読本』1-13)
- 13 黒潮と親潮(⇐『高等科国語』1-7)
- 14 故郷(⇐『高等小学読本』1-30)
- 15 燈標の火(⇐『高等科国語』1-15)

3「産業の恩人(野国総管・儀間真常)」は、ともに沖縄の地域産業振興(芋・精糖)に尽くした二人の人物の伝記教材である。これに蔡温(蔡温は、『よみかた 三年生』に収録)を加えた三人を沖縄では「産業の三大恩人」として崇めている。その意味で、この三人は沖縄の人であれば、誰でも知らなければならぬ郷土の三大偉人でもあった。

4「山村」は、山村(川辺村)に住む僕の目を通して一年間の生活をレポートした説明文である。この中には、氏神様や雪合戦など、当時の本土では許されなかった事柄や言葉が登場している。

7「トラックの上で」は、理科的内容である慣性の法則について、車の急停止、左折・右折に伴う身体の動きなどを実生活の体験と結んでわかりやすく述べた説明文。

10「山吹の花」は武士道教材であり、これも本土では許されなかったものである。

なお、この教科書も「教生地方実習日課表」(川崎初等学校、1948.3.12)によれば、この日の二時間目に授業することが示されている。これにより、この教科書も実際に使用されたものであることがわかる。

### ◎八年生

八年生用は、『読方 八年生』(那覇市市民文化部)と『読方 八年生』(『琉球史料』)の二冊を見いだすことができている。これら二冊も、全く同一の目次である。

- (1)『読方 八年生』(『琉球史料』)
- (2)『読方 八年生』(月刊沖縄社)復刻版

- 1 春のよろこび
- 2 春の草(⇐『高等小学読本 農村用』3-2)
- 3 村を興す力
- 4 首里城趾の赤木(☆新教材)
- 5 蹴られたニュートン
- 6 日曜日の理科実験
- 7 沖縄船とポルトガル船(☆新教材)

- 8 文字 (⇐『高等小学読本』3-3)
- 9 望遠鏡と顕微鏡 (⇐『高等小学読本』3-12)
- 10 バクテリア (⇐『高等小学読本』3-13)
- 11 ベスタロッチ (⇐『高等小学読本』3-6)
- 12 川柳 (⇐『高等小学読本』3-7)
- 13 ナポレオン (⇐『高等小学読本』3-10)
- 14 感情 (⇐『高等小学読本』3-5)
- 15 汝の母 (⇐『高等小学読本第三学年上』13)
- 16 青葉の笛
- 17 地震 (⇐『高等小学読本』3-24)
- 18 空の景色 (⇐『高等小学読本』3-11)
- 19 白い煙と黒い煙 (新教材)

8「首里城趾の赤木」は、編集主幹であった仲宗根政善が執筆した文章のようである。当時の沖縄の状況をよく反映した内容であり、起承転結の構成に則った美しい文章である。まず起承部分で敗戦前の首里の美しい静かな風景が描き出される。が、転の部分になると、沖縄戦のすさまじさがその対比において次のように記される。

ところが今度の戦ひで鬱蒼と茂ってゐたこの森は、ものすごい艦砲を受けた。天日をさへぎってゐた赤木の葉はことごとく吹飛ばされ枝といふ枝はへし折られ幹はさんざん射ぬかれて焼けこげてしまった。ただ怪物の骨みたやうな気味悪い残骸がたつてゐるばかりである。もう昔のおもかげなどどこにも見られない。(p.10)

変わり果てた首里の街を赤木を通して描く。そして結の部分で、沖縄の若者に向けて次のようなメッセージを送っている。

焼けこげた赤木の根からは、みずみずしい芽が勢よくのびた。陽光をあび清水を吸うて、新しい大木の芽は、あの大きな根から萌え出て来た。天空に聳えんとする若々しい意気がその一葉一葉に燃えてゐる。やがてたくましい枝を思うままにさしのばし、再び鬱蒼たる森になるであらう。(p.11)

こうして絶望の中に着実に立ち上がる赤木に若人の姿を映しだし、沖縄の再建を確信する希望を力強く打ち出している。

直接占領下であった沖縄にあって、これくらいの内容・表現が精一杯だったようである。仲宗根はこの時、崩れ落ち痕跡さえ止めない首里城址の無惨な様子を見て、花も木も育たず、このまま歴史の証人としてあり続けねばよいと思ったと後に記している。そのことを思えば、この教材はずいぶん自らを押さえて表現しなければならなかったものと思われる。しかしそれでもなお伝えないではいられなかった仲宗根、当時の沖縄

知識人の若者に期待する熱いメッセージをここに感じ取ることができよう。

敗戦から国家再建に向かうこの時期の教科書には、日本本土と沖縄とである種の共通性が見られるように思われる。と言うのも、この時、日本本土にも同じような状況があり、文部省で国語教科書の執筆に当たっていた石森延男にもこうした教材化が多く見られる。

6「日曜日の理科実験」は、水圧に関する実験を対話型で興味深く説明した理科的教材。

9「沖縄船とポルトガル船」は、沖縄に関する教材である。沖縄が海洋貿易で果たした歴史的役割について説明した文章。『よみかた 四年生』の「13 マラッカへの船」と一部呼応する教材である。なお、文章中に「沖縄人」という用語が使われている。時代を映した一側面かと思われる。

19「白い煙と黒い煙」も、沖縄の中部・名護が話の舞台となっている沖縄教材である。筆者が名護の裏山に登ってその中腹から美しい景色に見とれていると、風もない春の空に白い煙がしきりと流れてくる。老爺と老婆の二人がその近くで焚き火をしていたのである。不審に思って事の次第を尋ねると、大阪に行く娘が乗っている船がいまこの沖合を通る、その船に向けて最後の別離を伝えるその合図の煙であると答える。「合図の煙！親子の別！あゝ、何といふ美しい情景であらう。汽船のデッキの上からはかの乙女が、涙に曇つた眼でふる里の山を慕ひ老父母を恋うて、この白煙を見つめてゐることであらう」(p.70)。

感動悲話として沖縄に長く伝えられた話である。この話の筆者は広島高等師範学校から沖縄師範附属主事として赴任した稲垣国三郎であり、実際の体験談を元にして書いたものであるという。その最初は、氏の著書『沖縄小話』(盛運堂、1934)に収められた。教科書教材としては五十嵐力の『純正国語読本』『純正女子国語読本』(早稲田大学出版部)に採録され、沖縄初の全国版教材となった。こうして「アオイソラ ヒロイウミ」から始められた沖縄版初等学校用国語教科書は、同じく沖縄を舞台にした教材「白い煙と黒い煙」で閉じられたのである。

以上の初等学校一年生から八年生の国語教科書に加えて、高等学校用国語教科書も編纂されたようである。が、一体何冊が編集されたのか、残念ながらその全貌はわからない。が、現在、筆者が入手し得ている範囲でその実態を以下に提示しておきたい。

なおこの時期における沖縄の学校系統としては、昭和21年1月31日の文教部の文書によると、「6歳以上14歳までの八学年を義務的に最小限三時間、一週六日

間、読方、書方、算数、(体操、英語)等の課目を設けること。教材は目下軍政本部で編集して配布しつつあること」とあり、初等教育(義務教育8カ年、6歳から14歳)が義務づけられていた。そしてこれに続く学校として高等学校があった(4カ年、14歳から18歳)。

### ◎高等学校一年生

#### (1)『高等学校文学教材 一』

未見である。が、仲宗根の発言によれば、この冒頭に仲宗根自身の手になる次の詩「島の根はこゆるぎもせず」を掲げたという<sup>1)</sup>。

「島の根はこゆるぎもせず」

若人に送る  
 天地の分れし時ゆ  
 光さす島ぞあが島  
 大海に波荒るとも  
 磯のべに寄せてぞかへす  
 大空に嵐吹くとも  
 木の葉のみもぎてぞすぐる  
 艦砲のひびき遠さり  
 露のみぞしげくおきたる  
 島の根はこゆるぎもせず  
 天つ日の光照りそひ  
 千代八千代栄ゆる島ぞ  
 焼け跡に芽ぐむ若草  
 我生けり生きて我あり  
 はらからの捨てし命を  
 ひろひもちををしく立たむ  
 うるま若人

反歌

島の根はこゆるぎもせず大空の  
 光に映えて若葉かほれり

歌人でもあった中宗根の沖縄の若人に対するメッセージであった。「艦砲のひびき遠さり／露のみぞしげくおきたる／島の根はこゆるぎもせず／(中略) 焼け跡に芽ぐむ若草／我生けり生きて我あり／はらからの捨てし命を／ひろひもちををしく立たむ／うるま若人」は、八年生の教材「首里城趾の赤木」にも似て沖縄再建を力強く訴えかけた編集者からの心からのメッセージであったと言えよう<sup>2)</sup>。「我生けり生きて我あり／はらからの捨てし命を／ひろひもち」などは、ひめゆりを率いた仲宗根にとっても、また同時代を生きる若者にとっても共鳴されやすい心境であったものと思われる。なおこの文章に関しても、当の仲宗根に深い思い入れがあり、

後世何度もこれを話題にしている。仲宗根の歌集である『蚊帳のホテル』(1988.10.20, 沖縄タイムス社)には、冒頭にこの歌が掲げられている。若干の表現の違いはあるが、内容的にはほぼ同じである。校正の跡が見られるその日付けは1947.1.27となっていて、「露のみぞしげくおきたる 島の根はこゆるぎもせず」の間に「若人よいたくなげきそ」が見せ消ちになっている。そして表題も「学徒に贈る」となっている。

残念ながら、現在の所、この「高等学校文学教科書」についての詳細はこれ以上はわからない。ただ、上記の仲宗根の発言、これに続く『高等学校文学教材 二』を入手できていること、さらにこの編集に携わった嘉味田宗栄の回想があることなどから考え合わせると、少なくともこの二冊の発行はあったものと推察される。その『二』の目次は、次のようになっている。

### ◎ 高等学校二年生

#### (1)『高等学校文学教材 二』(那覇市市民文化部)

- 1 田園の春(長塚節)
- 2 五月の太陽
- 3 シボラの国(大山卯太郎)
- 4 三坪の土地あらば(五十嵐力)[馬鈴薯・三坪の土地あらば]
- 5 蛍(横山桐郎)
- 6 兄弟(山本有三)
- 7 若葉(蕪村俳句)
- 8 機会
- 9 涼み台(寺田寅彦)[新星・線香花火・藤の実]
- 10 心の小径(金田一京助)
- 11 エス(広津和郎)
- 12 国上山(良寛)
- 13 雑草(斎藤茂吉)
- 14 月天心(蕪村)
- 15 運動精神
- 16 ころも(北原白秋)
- 17 読み書きの第一義(五十嵐力)
- 18 親心(雲萃雑誌)[約束の松・詩歌の道・一人の弟子]
- 19 英米人の気風(床次竹次郎)
- 20 顔淵(安藤圓秀)
- 21 泉の徳(柳田国男)

さすがに高等学校の国語教科書(文学)は、定評のある名文で集成されている。「三坪の土地あらば」(五十嵐力)、「涼み台」(寺田寅彦)、「心の小径」(金田一京助)、「月天心」(蕪村)などは、いずれも

長く採録され続けた、それまでの代表的な中等国語教材であった。

この『高等学校文学教材 二』について、その編纂者の一人であった嘉味田宗栄に、次のような回想がある。

沖縄民政府文教部編修課で、監修官というもののしい職名の教材づくりをしたのは、たしか、昭和二十年のおわり頃から、翌二十一年の九月、糸満高等学校に赴任するまで続いた（中略）

しごとにとりかかったときは、あちこちの壕や民家などで見つかったという、旧制中学の古い国語教科書の、かなりの種類があつめられていた。これでも無ければ、作業は、とうてい始まらなかった。私は、これらの拾得物どもの中から、軍国にかかわる素材を注意深く避け、カリキュラムの考慮なんぞそっちのけで、原稿用紙にコピー（引用者注：筆写の事であろう）したうえで課長へ提出し、米軍の係り官の検閲を受けたあと、さっそく、原紙きりにかかる。

けっきょく、毎日のしごとは、古びた教科書を読みあさる、検閲にふれぬよう適当な文章を拾いあつめる、検閲をうける、パスすればそれを原紙にきり、刷らせる、のくりかえしであった。（中略）

昭和二十一年九月、糸満高等学校に赴任してまもなく、恩師玉城泰一校長のすすめで、当の文学教材をつかつての研究授業を公開せねばならなかった。唯一の印刷物で、私は、みずから辞書づくりのまねごとをこころみ、予習のメモを学生たちに作らせ、文字通りおどおど演じてみせた<sup>3)</sup>。

「あちこちの壕や民家などで見つかったという、旧制中学の古い国語教科書の、かなりの種類」とあるように、初等学校の場合と同様に高等学校の教科書も、旧教科書から適切な教材を選び出し、それを集成して編纂したことがこの回想からわかる。

### 三. 沖縄版「ガリ版刷り教科書」の特色

#### 1. ガリ版印刷

本土の教科書は貧しいながらも活字印刷であったが、沖縄版のそれはさらに貧しいガリ版印刷になっている。

#### 2. 『よみかた』（特にその初版）は、読本・修身・理科などの総合読本的性格

戦前に使用されていた国語教科書（『ヨミカタ』・『よみかた』・『初等科国語』・『高等科国語』、一時代前の『小学国語読本』—いわゆるサクラ読本からも）はもちろん、修身教科書（『ヨイコドモ』・『初等科修身』）からも教材が多く採録されている。戦後まもなくという時代状況を考慮するならば、このことはとても承服

しがたい驚くべきことである。沖縄版教科書におけるこの修身教科書からの大量採録をどう考えれば良いのか。と言うのも、本土にあって修身科は、授業は停止、その教科書は回収されてパルプ工場へ送られるという断罪が科せられた教科であったからである。沖縄は守礼（5年生教材「礼儀」参照）を重んじる、それゆえの採録だったのかもしれない。さらに沖縄では、本土では編集されなかった『礼法要綱』も戦前のものを参照しながら編纂されている。こうした本土と沖縄の不整合とも取れる政策をどう考えればよいのか。直接占領という置かれた立場からすれば沖縄の方がもっと厳しい状況が想定されるのだが、この辺りは必ずしもそうっていない。

#### 3. 沖縄固有の教材

本教科書は全国版の教科書と違って沖縄の子どものための教科書であることが明確であり、沖縄再建（新沖縄の建設）に対する編纂者からのメッセージが各教科書にそれぞれ提示されている。それゆえ、沖縄の偉人、産業、自然等に関する教材が意図的に採録され、地域教科書としての性格も発揮している。中でも「首里城趾の赤木」・「島の根はこゆるぎもせず」は、その典型であったと言えよう。

#### 4. 「国語」という名称が許されなかった

「国語」が結果的に「日本国の言語」を示すことになるがゆえに、沖縄ではこれは固く禁じられた。このことは、日本に属さない孤としての「沖縄」であることを強烈に印象づけた。本土の他のどこの地域にも適応されなかった沖縄地域（奄美大島を含む）に固有の絶対命令であった。この「国語」という言葉が教科書名として許されず「よみかた」「文学」になったこと自体、沖縄の置かれた悲惨な立場を露わにしていた。その意味では一教科書の命名ではおさまらない占領政策の実相をここに見ることができるのである。なお一時浮上していた教科書の文章を沖縄方言で書くといったことの意味もここに淵源を持っていたのであった。沖縄を物心両面において日本から切り離すこと、沖縄を極東アジアの最前線基地としてその足場とすること、まさに米国の占領政策の核心としてそこに焦点化されていたのであった。したがって、英語促進のためにローマ字教育を優先させたこと、それに関連して道標などを英語で表記させたことなど、いずれもこうしたことと深く結びついていたのである。

#### 5. 薄い教科書

ページ数の少なさ、季節の不整合などから思えば、

本教科書以外の別本の存在を想定できなくもないが、実際にはこの教科書が紛れもない、戦後初期の沖縄における唯一の教科書であり、それぞれの一冊が一年間全ての教材であったようである。これまで別本は発見されていないし、『琉球史料』その他の関連資料にもそれらの可能性に言及したものはない。

#### 6. 挿絵の挿入

本土の暫定教科書には一例も見られなかった挿絵が本教科書群には入っている。これは驚きである。子どもの興味を配慮したのであろうが、この挿絵をガリ版印刷で入れるのは技術的に相当の苦労であったろう。

#### 7. 季節・漢字配当への配慮なし

教科書編集の言わばイロハともいえる季節への配慮はほとんど働いていないし、新出漢字への配慮もまったくない。教材数も決して多くない。その意味で、教科書としてはないないづくしではある。

#### 8. 何度かの改訂

一回きりの編纂・発行ではなく、何度か改訂された跡がうかがえる。その実態は、全面改訂というよりも文章表現を一部修正するなどの小改訂にとどまっていた。したがって注意深く見なければ改訂の事実を見逃しそうになるほどである。

ただ1947年改訂版は改訂幅が大きかったようで、戦前版からの収集だけでなく、本土の戦後新教科書（文部省発行）からも採録されている。先述の四年生の(2)の教科書はその一例である。できるだけ本土並みを志向した、その結果かと思われる。

#### 9. 素人集団、短期間編集としては見事な出来栄

それにしても、この素人集団（教科書編集をプロとしていないという意味で）による教科書編集、しかも短時間、資料も少なく、ガリ版による印刷という最悪の状況の中での編集は、見事と言わざるを得ない。むしろその中身についての様々な注文はあったろう。また、他ならぬ当の編纂者自身にも忸怩たる思いはあったろう。そうした限られた状況の中で沖縄再建（新沖縄の建設）の使命を帯びた努力の跡は、沖縄教材を中心に十分にうかがうことができる。

#### 10. 文部省暫定教科書の類似と相違

本書の編纂方法は、旧教科書から選択配列するという文部省の暫定本のそれと奇しくも一致している。もっともあの状況下ではこれしか方法はなかったのかもしれない。が、文部省版と沖縄版とでは編纂方法も編纂

時期もほぼ同じなのに、中身はかくも異なっていた。その最大の違いは、修身の扱いであったろう。東京で実施したCIEの教科書検閲は、沖縄に全く影響を与えなかったのであろうか？沖縄に関するこの種の資料は未見である。なお仲宗根の日記には、本土で実施された教科書検閲基準も知っていたことがうかがえる。その軍国主義・超国家主義・神道主義を教育世界から排除することを求めた資料を入手していたのである。また、本土で行われた国民学校教科書の削除修正箇所について記したメモも残している。おそらくこうした動向を把握しながら編集を進めたものと思われる。が、仲宗根が本土の文部省編纂の暫定教科書を見たという記述はない。

### 四. 沖縄版「ガリ版刷り国語教科書」の回想

この沖縄版「ガリ版刷り国語教科書」について、どのような受け止めがなされていたのか、最後にこのことについて触れておきたい。その資料として、個人を訪ねて回想談を求める方法もあるが、すでに50年以上が経っている今、信頼の得られる情報は残念ながらすでに期待薄である。ならば、当時に比較的近い資料として各学校の創立記念誌に展開されているこの教科書をめぐる手記・回想・座談会で見ることはできないか。少なくとも現時点でそれを試みるよりは数段効果的であろう。なお、できるだけ『よみかた』に直接かかわるものと思うが、それだけでは資料薄なので、このガリ版刷り教科書について触れられているものを広く取り上げることとする。なお、これらにあってもガリ版刷り教科書に関する記事、若しくは写真は載せられていても回想等まで載せられているケースは決して多くない。それら数少ない中から幾つかを取りだしておきたい。

- 1 先生方は自分で書いたものを持ってきて生徒に教え、黒板に書いて、皆は書き写していた。ガリズリは兄がそっくり書き写して一冊の本を作ってくれた<sup>4)</sup>。
- 2 先生方だけが本を持っていた。黒板に書いたものをノートに書いた。教科書を書き写していた。先生が好きなものを教えていた<sup>5)</sup>。
- 3 二十二年、私は一年生ですが、ガリ版ずり、これも、全部が全部あったんじゃなく先生だけ。それで父が、先生から本をかりて写本してもたしてくれました<sup>6)</sup>。
- 4 米軍監視の下で「沖縄だけの教科書」がガリ版で印刷されて、四、五人に一冊の割合で配布された。その中には沖縄の偉人なども含まれ蔡温も「いまか



ら二百五十年前に、沖縄に蔡温という偉い人がいました。小さい頃は体も弱く、学問もできませんでした。」の書き出しで取り上げられていた。子供たちは米軍のちり捨て場から、米軍が使い残したタイプ用紙などの裏の使える紙を拾って来て、それを帳面代わりにして、まず教科書を写し取ることから始めた。この写本のうちに子供たちは漢字を覚え、そして文章力をつけていった。(中略)

教科書などは先生が一冊、それもガリ刷りのをもって居られただけ。従って一日の授業は「朝の写本」と称して黒板いっぱい書かれた板書を粗末なノートに書き写すことから始まりました<sup>7)</sup>。

- 5) 昭和二十一年五年一組。教科書のないうまに板書の写本と僅かに手に入る名作物語の読み語りを楽しみとする一ヵ年であった<sup>8)</sup>。

これらの体験談を通じてうかがえるのは、

- ・教科書はガリ刷りで、先生が一冊持っていただけ
- ・それを黒板に書き出し、児童は書写する
- ・中には家族が筆写して持たせてくれたものもあるが、これは少数。

といったところが一般的な姿だったと言えよう。この事情は先述した教生の地方教育実習においても同様でそこには「教科書は二人に一冊」とあり、このことを踏まえて授業するよう促されていた。こうして教科書の編纂者側では懸命に教科書を生み出していったが、ガリ版刷り（一度に印刷できる枚数も限られる）で、しかも用紙不足とくれば、教科書不足は必至であったと言わざるを得まい。教科書を米軍のタイプ用紙の裏に印刷しているケースもあった。また児童・生徒が自ら筆写するという状況も日常的であったようである。

## おわりに

このガリ版刷り教科書は、日本本土から文部省版の教科書が移送される昭和22年度末まで何度か部分改訂を経ながら編集・発行された。昭和23年度、次第に本土から教科書が届けられるにしたがって、やがて姿を消すことになったのである。

なお、これまで取り上げてきたガリ版刷り教科書は主として沖縄本島についてのことであった。それらのさらに地域版である宮古島、八重山、さらに当時直接米軍の占領下という意味では同様の状況にあった奄美大島では、またそれぞれ事情は異なっていた。その点については、また別の機会を得たいと思う

## 【注】

- 1) 仲宗根政善の残した未定稿としての草稿集「新教育の歩み」(年月日不詳)には、ほぼ同文(表題は、「うるま島根」)の歌詞の最後に次のような書き入れ(1947.1.25)がある。

いざをのこ力のかぎり  
いざをのこ力のかぎり  
あはせもちふるひおこさむ  
うるま島根を

これに付箋があり、そこには「青年中等学校の写し 一年間のみ使用」と記されている。青年中等学校は、具体的には実業高等学校のことであり、その「文学」の冒頭教材であった(仲宗根『石に刻む』, 1983.5.25, 沖縄タイムス社, p.339)。

- 2) この「島の根はこゆるぎもせず」「首里城址の赤木」執筆の背景となる具体的なことが、草稿集「新教育のあゆみ」に次のように記されている。島尻地域で開催された教科書説明会(1946.7)の草稿のようである。長文であるが、本教科書の根底を成すものとして、ここに関連部分を抜粋して提示しておく。

敗戦の結果、我々の郷土は、全く焦土と化してしまった。幾千年我々の祖先の築いた文化は一朝にして灰燼に期してしまった。沖縄の文化を象徴するあの首里の御城はふっとんでしまっただこへいったか分らない。霊御殿を始め我々先祖の墓はあばかれ、鄭重に葬られた祖先の骨も散乱して風雨にさらされた。世界に沖縄ほどの惨禍を蒙ったところはどこにもない。ここではさほどに戦ひの跡も分りませんが、一度中頭島尻に足を踏み入れた時全く沖縄の様相は一変してゐることを感ずるのであります。これが自分の住んでゐた沖縄であったかと思ふ。浦添城趾、首里、那覇、与那原、泡瀬、馬天、糸満、喜屋武、摩文仁等全く言語に絶し如何に文人の修飾をもってしてもいひつくすことは出来ないのであります。而も我等幾多の同胞は野に山に文字通り草むす屍となって未だ散乱してとぶらふ人もゐない状態である。戦ひにまけることがいかにみじめなものであるか、この惨憺たる状況は語る術がない。この現実の状態を見てゐては誰しも茫然自失するのであります。

然しいくらうちのめされてもいくらさいなまれても我々は決してそのままにうちひしがれることはない。(天災地変多き地)心身ともにさいなまれ傷だらけになってゐても我々は決して髓の髓まで傷ついてはゐない。たたかれてもたたかれても髓は極めて健全であると思ふ。山々を見れば艦砲にうちくだかれて山は山骨をむき出し粉をふいてはゐる。横縦無

尽にきり割られてはみても私は島の根は依然として島の根として存してゐると思ふ。私は盤石のこの島の根に立って必ずこの島は復興すると思ふ。

私達は「首里城趾の赤木」といふ教材でこのことを強調しておいた。去年の九月頃であつたと思ふ。自分は始めて首里へ行って見た。全く荒廃しきって路も分らない。龍筆池畔のあの世持橋のあつた上に立って茫然としてゐた。足許には尚真王時代我々の祖先が世界の七つの海をかけめぐつたあの横溢せる意気をきざんだ彫刻、貝類やかに類その彫刻が散乱している。その上に立って首里城を望んだが御城の跡形もない。御城の下にあつたハンタ山の赤木はすっかり艦砲にいぬかれて全く怪物の骨みたやうな幹が立ってゐるばかりであつた。ところがよく見るとあの根からみづみづしい芽が勢よく伸びてゐるではないか。私はそれを見て、これあるかな根あるものはかくの如しと感歎久しうしたのであります。私はこの新しい芽が我々沖縄を象徴してゐるやうに感ぜられたのでありま

す。我々沖縄の島はいかに艦砲に射たれたところでの島の根は依然として健在であるこの島根さへ堅実に残ればこの島の根からは必ず新しい島の芽が伸びるのだ。さうしてこの芽が平和の光をあびてすくすく伸びるのだと私は信じてゐる。(pp.4~6)

- 3) 嘉味田宗栄「にわかづくりの文学教材」, 那覇市企画部市史編集室『那覇市史資料編第3巻8市民の戦時・戦後体験記2(戦後・海外編)』(1981.3.30, p.232)
- 4) 恩納小学校創立百周年記念事業会『恩納小学校創立百周年記念誌』昭59.5
- 5) 玉城小学校百周年記念事業期成会『玉城小学校創立百年誌』昭58.2.25
- 6) 本部小学校創立百周年記念事業期成会『本部小学校百年史』昭57.3.10
- 7) 北谷小学校創立百周年記念事業期成会『北谷小学校創立百周年記念誌』昭59.9.30, p.279, p.288
- 8) 平良第一小学校創立百周年記念事業期成会『平良第一小学校創立百周年記念誌』昭60.8.20, p.315